

文法化現象としての否定辞繰り上げ

守屋 哲治*

堀江 薫**

*金沢大学教育学部

**東北大学大学院国際文化研究科

moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

1. はじめに

否定辞繰り上げ現象 (Neg Raising Phenomenon、以下 NR 現象と略記) とは、複文において、主節の否定辞が従属節にかかるとして解釈される現象である。

- (1) a. I don't think he will come back any more.

b. 彼は二度と戻ってくるとは思わない (*?考えない)。

(1a) の any more は否定対極表現であり、通例は同じ節内に否定辞などの要素が共起することを要求する。しかし、要求する否定辞が any more が属する従属節内ではなく、主節にあることから、主節の否定辞が従属節にかかるとして解釈されていることがわかる。同様な現象は (1b) の「二度と」と「ない」の関係に見られる通り、日本語に関しても観察される。

NR 現象を可能にする述語 (以下 NR 述語と略記) には、異言語間の差異や、同一言語においても容認性に関する判断の差異があることが知られている。

- (2) a. I don't think they'll hire you until you shave off your beard.

b. % I don't guess they'll hire you until you shave off your beard.

- (3) a. I don't suppose they will win.

b. I suppose they won't win.

- (4) a. Bill didn't suppose that they had won.

b. Bill supposed that they hadn't won.

(2a) の think はすべての英語話者が NR 述語として容認するのに対して、(2b) の guess は NR 述語として容認するか否かで判断が分かれるという (Horn 1989: 347)。また、think と意味的に類似していると見られる日本語の「考える」は (1b) に示すように英語の場合とは異なり NR 述語にはならない。

また、(3a) と (3b) は同義の解釈が可能なのに対して、(4a) と (4b) は同義の解釈がで

きないとされている (Jackendoff 1971: 291)。これは、主語の人称や動詞の時制といった要因も、NR 現象を許す条件に入ってくることを示している。

NR 現象に関しては従来、変形操作によって従属節の否定辞を主節に移動するという説や、移動を想定せずに何らかの意味解釈のメカニズムによって主節の否定辞が、従属節にあるかのような振る舞いをするという説などがあった。しかし、いずれの説でも、上で述べたような NR 述語に関する個人間・言語間の変異や、人称・時制に関する制約を十分に説明することができなかった。

そこで本研究では、NR 現象が文法化のプロセスを経て客観的表現が主観的表現へと変化した結果生じたものであると位置づけることにより、上で述べたような問題に対する新たな視点を導入するものである。2 節で文法化の主要な特徴を概観し、それぞれの特徴がどのように NR 現象に当てはまるかを検討する。3 節では NR 現象を文法化と位置づけることにより上でみたような問題がどのように解決されるかを述べ、4 節でまとめと展望を述べる。

2. 文法化の観点からみた NR 現象

文法化 (grammaticalization) とは、語彙的・客観的意味を表す要素が、文法的・主観的意味を表す要素へと変化する過程を指す。言語類型論の分野などで、数多くの言語の文法化の研究が蓄積されており、人間言語の変化の特徴の普遍性を追求する上で重要な位置をしめる言語現象であるといえる (Hopper and Traugott 1993)。

文法化は通時的変化としてだけでなく、共時的な体系においてもいくつかの特徴を示している。本節では、典型的な文法化の現象を例にとり、どのような特徴が見られ、それらの特徴が NR 現象にどうあてはまる

かを述べる。

2.1. 意味の一般化

ある要素が文法化をすると、その要素が持っていた意味は、具体的・個別的なものから、抽象的・一般的なものへと変化していく傾向にある。

(5) a. John is going to London next month.

b. John is going to work at our office.

(5a)では go に「空間の移動」という意味が残っており、方向を示す副詞句が共起していることにもそれが表れているが、(5b)のように be going to で「未来」の意味を表すようになると、具体的な空間移動や方向性の意味が消えており、未来に関する予測・予定といった抽象的・主観の意味が加わっている。

NR 現象においては、NR 述語は、文字通りの「思考」に関する意味から、命題に対する「判断留保」という話者の認識様態を示すモダリティ的な意味へと変化しており、上述の「意味の一般化」という特徴にあてはまる。Bybee and Sheibman (1997) は、I don't think に節が後続する場合には、not thinking にあたる語彙的な意味で用いられている例は一つもなく、従属節に対する認識様態的 (epistemic) な態度を示す働きをしているという報告をしている。さらに (6) のような実例を挙げて、このような場合 don't は動詞 think を否定しているのではなく、従属節全体にかかるとしており、モダリティ的な意味を持つ I don't think が NR 現象を起こしていることがわかる。

(6) yeah I don't think they'll go for your fantasy.
日本語でも同様なことが言える。「彼が二度と来るとは思わない」という文において「思わない」は、断定を和らげる働きをするモダリティ表現であると考えられる。

2.2. 再分析

文法化が起こることにより、形態論・統語論のレベルでの境界線が変化する場合がある。これを「再分析」と言う。(5) の例で言えば、(5a)における go は主動詞で、助動詞 is と形態素 -ing によって進行形を示しており [is][going][to London] のように区切られるが、(5b)では is going to が未来を示すひとつの語彙的まとまりとして機能し

ており、語の境界は消滅して [is going to] [work at our office] のようになっていると考えられる。一旦このような語の境界線の変更が起きると、新たなまとまりが音韻的にも縮約してひとまとまりになる場合がある。例えば、(5b)は、非標準的な形であるとはされているものの (7) のような縮約形を用いることが可能になる。

(7) John gonna work at our office.

Bybee and Sheibman (1997) によると、don't の音韻的な縮約は I don't know について I don't think の場合が進んでいるとしている。これは NR 現象を起こしている I don't think の連鎖が一つのモダリティ表現として再分析されている可能性を示唆している。また、I don't think もひとつの副詞句として、挿入句的に用いられていると解釈できる (8) のような用例も見つかっている。

(8) Crichton did a clog dance on my drawing board, and altogether the evening was a tremendous success, the like of which I do not think has been experienced in the manse before.

(COBUILD Corpus)

これらのことから、英語に関しては NR 現象を起こしている主語と動詞の組み合わせが一つのモダリティ表現として再分析されていると言える。

2.3. 段階性

文法化に伴う意味の一般化や再分析といった変化は、一足飛びに起こるものではなく、中間的な段階を経て進んでいくと考えられる。これは中間的な構造の存在という形で表れる。例えば (9a) に対する答えの (9b) は、is going を移動の意味に解釈することも未来の意味に解釈することも可能であるとされている (Heine et al. 1991)。

(9) a. Are you going to the library?

b. No, I am going to eat.

NR 現象においても、(8) に挙げた実例は、I do not think の部分が、主語と動詞の連鎖であると解釈することも可能であり、中間的な段階を示しているといえる。

また、NR 現象の示す段階性のより重要な面として、典型的な要素から非典型的な要素への拡張という現象が挙げられる。これは認識様態のモダリティを示すという

NR 現象の場合、まずその機能に最も適した語の組み合わせから NR 表現として文法化していき（英語の場合であれば I don't think）、より典型的でない要素（例えば、I don't guess）へと拡張していくと考えるものである。このような段階性があることは、Bybee and Sheibman (1997) のデータから十分に示唆されており、また、肯定の表現でも、think などは一人称主語の場合に最もモダリティ表現として起こる確率が高いことが Thompson and Mulac (1991) で報告されている。

以上、本節では文法化の主たる特徴を概観し、それらの特徴がいずれも NR 現象にあてはまることを見た。次節ではこのように典型（プロトタイプ）から非典型への拡張という観点から NR 現象を文法化と位置づけることにより、先行研究では未解決であった問題がどのように説明できるかを述べる。

3. NR 現象のプロトタイプ構造

本節ではまず NR 現象の機能について触れ、そこから NR 現象にとって最も典型的な要素の条件を導き出す。また、典型的な要素から非典型的な要素への拡張という考え方を取り入れることで、個人間・異言語間の変異が説明できることを示す。

3.1. NR 現象の機能と典型的要素

NR 現象の機能は、「従属節から主節に否定を移すことでその否定を主観化した、話者の確信度を弱くする」ことにある（守屋 1998: 43）。従って、(10) のように否定が強められると NR 現象としての読みは不可能になる。

(10) a. * I didn't ever think that John would leave until tomorrow.

b. * I never thought that John would leave until tomorrow. (Lakoff 1969: 142)

否定の主観化の機能を果たすのに最も適した要素の組み合わせは (11) のようになる。

(11) a. 主語：一人称

b. 時制：現在

c. 述語：主観的態度の存在のみを示しうる述語

これらはいずれもモダリティ表現という

性質から由来する。否定の主観化とは、話者の発話時点での判断として否定を述べるということであり、話者が主語に立つ一人称と、単純現在時制が用いられるのはごく自然なことと言える。(11a) や (11b) は、1 節で見た (3) と (4) の対比が生じる原因になっている。また、英語の場合 think が (12c) の条件に当てはまることは 2.3 節で紹介した Thompson and Mule (1991) の研究などからも明らかである。

これらのことから、英語の場合 NR 現象に最も典型的な表現が I don't think であり、このことは Bybee and Sheibman (1997) が報告している I don't think の頻度の多さや、I don't think における don't の音韻的縮約度の進行などに反映されている。そしてこの典型的な要素の組み合わせから、徐々に否定のぼかし（婉曲化）という機能のみが浮き彫りにされて非典型的な要素にも NR 現象が拡張されていくと考える。そこで次に典型からの拡張の考え方を取り入れることにより、個人間・異言語間の変異がどのように説明されるかを検討することにする。

3.2. 個人間・異言語間の変異

同一言語の母国語話者でも、ある述語を NR 述語と認めるか否かに個人差が出る場合がある。英語では、(2a) と (2b) の対比がその例であった。これは、think のほうが (12c) の点において guess よりも典型的であるために、think は全員が NR 述語として認めるものの、guess のような非典型的な述語まで NR 述語が拡張しているか否かには個人差があるためだと考えられる。このような NR 述語としての容認度の差は suppose と guess の間にもあるとされているが (Horn 1978)、suppose のほうが guess よりも NR 述語と認定されやすいのは、やはり suppose のほうが guess よりも (11c) の点でより典型的であるからだと考えられる。

異言語間の NR 述語の変異にも (11c) が関わっている。どんな述語が話し手の主観的態度を表すことができるかが言語ごとに異なり、それが NR 述語の言語による違いを生んでいる。

日本語では、英語の think とは異なり、「考える」は (11c) の条件には合致せず、「思う」

がその働きをしている。森田(1989: 265)は「思う」と「考える」の違いを(12)のように述べていて、(13)のような文でその違いを例証している。

(12)「思う」は「考える」と違って、利他的判断ないしは感性の没入で、それだけに対象把握は単一的であって、物事を分析的に眺めとらえるという知的行為ではない。

(13) a. 新しい会社を作ろうと思う／考える。

b. いかに会社を再建するかを*思う／考える。

(13a)のように思考対象が漠然としたものであれば「思う」も「考える」も使えるが、(13b)のように手段や理由などの論理的分析過程が加わる場合には「考える」しか使えない。このような違いが(14)に見られるような違いを生んでいると考えられる。

(14) a. この理論は決して時代遅れだとは思わない／*?考えない。

b. この漫画はちっともおかしいと思わない／*?考えない。

また英語では say は NR 述語にはならないが、日本語の「言う」は(15)に示すように NR 述語になりうる。

(15)この作品は決してすばらしいとは言えない。

これは日本語で「言う」が「言葉を発する」という意味から、(16)に見られるように、主観的態度を表す意味を発達させており、(11c)の条件に合っているためである。

(16) a. それは確かに言える。

(=「理に適っている」)

b. 彼の判断は正しいと言える

(=「考えられる」)

このように言語ごとに(11c)の条件に合う述語が異なるために、同じような意味を表す述語でも NR 述語になるか否かが言語によって異なると考えられる。

4. まとめと展望

本研究では、NR 現象を文法化現象と捉え、典型的要素から非典型的要素へと拡張する現象と捉えることにより、個人間・異言語間の変異、時制・人称の制約が説明で

きることを示した。

今後は、英語や日本語だけでなく、その他の言語に関しても上でみたような説明があてはまるかを検証していこうと考える。

参考文献

Bybee, Joan and Joanne Sheibman. 1997. "The effect of usage on degrees of constituency: the reduction of *don't* in English." Joan Bybee's home page at University of New Mexico.

<<http://www.unm.edu/~jbybee/newpage1/ html>>

Heine, Bernd et al. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.

Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Horn, Laurence. 1978. "Remarks on Neg-Raising." In Peter Cole ed. *Syntax and Semantics Vol. 9: Pragmatics*, 129-220. New York: Academic Press.

Horn, Laurence. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

Jackendoff, Ray. 1971. "On Some Questionable Arguments about Quantifiers and Negation." *Language* 47, 282-97.

森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』東京: 角川書店.

Lakoff, Robin. 1969. "A Syntactic Argument for Negative Transportation." *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 140-7. Chicago: Chicago Linguistic Society.

守屋哲治. 1998. 「否定辞繰り上げ現象の認知的要因について」. 『金沢大学教育学部紀要人文科学・社会科学編』第 47 号、39-51.

Thompson, Sandra A. and Anthony Mulac. 1991. "A Quantitative Perspective on the Grammaticalization of Epistemic Parentheticals in English." In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine eds. *Approaches to Grammaticalization, Vol. II*. Amsterdam: John Benjamins, 313-329.